

神戸港をめぐる時間と空間—歴史的発展と地理的世界—

住元 麻耶

キーワード：大輪田泊，兵庫津，神戸港，日米修好通商条約，
阪神・淡路大震災

1. はじめに

神戸港は、日本の大港湾の中でもとりわけ長い歴史をもち、世界的視野から見ても国内情勢と国際関係に重要な役割を果たしてきた。その港がどのように発展してきたのか、また歴史的転換点に立って神戸港から国内外の遠近を見渡したときにどのような世界が広がるのかということを考察する。そして阪神・淡路大震災から20年経った今、神戸港をめぐるあらゆることを世代を越えて引き継ぐ準備を始めるのである。

本研究の目的は、まず神戸港の編年史を構成し、神戸港が歴史の舞台に大きく登場する時代をとらえて、当時の神戸港から広がる世界を俯瞰することである。筆者は自分の暮らす神戸が大好きだ。神戸港の歴史と地理を理解し、神戸の未来を考える。

本研究の方法は、文献資料の読解と現地調査である。また、神戸市教育委員会が主催する兵庫津遺跡調査の現地説明会に参加したり、実際に自分の足で兵庫津、神戸港を歩いたりして、文献資料と現地調査を融合して考察する。

2. 第1章 時間を通して見る神戸港の歴史的発展

(1) 神戸港が神戸港になるまで

表1. 神戸港にとくに関わる歴史年表

	神戸港	日本
800 頃	神戸の地名が確認される	
1100 頃	おおだのつまり 大輪田 泊 の名が使われ始める	
1133		平忠盛が日宋貿易開始
1173	清盛が大輪田泊を改修	
1180	国家事業として大輪田泊大規模改修	福原京遷都，京都に遷都
1581	池田信輝が兵庫城を築き港湾施設を整備	
1596	地震の火災・津波で被害	文禄の大地震
1672	幕府の命で河村瑞軒が下関迂回航路を開く ずいけん	
1700 頃		大阪・江戸で商業が発達する
1799	たかだやかへえ 高田屋嘉兵衛が北回り航路を開き、北海道の物資が兵庫の津に運ばれる	
1854		日米和親条約
1855	あみやきちへえ ふなたでば 呉服商網屋吉兵衛が船蓼場（船舶の修理場）の上棟式を行う	
1858		日米修好通商条約

1864	勝海舟の建言で神戸海軍操練所開設	明治時代が始まる	
1868	「兵庫」の名のもとに開港		
1871	イギリス人ジョン・マルシャルを初代神戸港長に任命	大日本国憲法発布	
1873	港長が兵庫開港規則草案を提出		
1889	神戸市が誕生		
1906	神戸港築港工事，神戸港築港基本計画発表		
1907	内務省が神戸港を第1種重要港湾に		
1923	内務省が重要港湾に指定		
1934	内務省により神戸土木出張所 神戸港修築事務所設置		
1941			太平洋戦争（-45）
1951	特定重要港湾に指定		サンフランシスコ平和条約締結 日米安全保障条約
1959	摩耶埠頭着工，日本初のコンテナ埠頭		阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）
1995	神戸港の復興と更なる発展にむけ神戸港港湾計画を改訂		
2007	阪神港誕生 （関税法および港則法の改正により神戸港・大阪港・尼崎西宮芦屋港の一開港化）		

出所：「西国街道と兵庫津」配布資料（2014），『江戸幕府領時代の兵庫』（2011），『源平と神戸 福原遷都から800年』（1981），『新しい社会 歴史』（2014）を参照に筆者作成

（2）兵庫・神戸の歴史への登場

兵庫や神戸は度々歴史に登場しており，その多くは国内情勢や国際関係に大きな影響を与えた歴史的出来事であった。菅原道真が太宰府に左遷される際に宿泊したことからついた地名や源平合戦の一部，一ノ谷合戦の戦場となり多くの物語が生まれた。このことから，この地は日本にとって重要な意味を持つ場所であるといえる。また，事実なのか定かではない伝説もある。それらは今も地域住民や観光客に愛されるものが多く，地域住民の郷土愛が深いことを表しているのではないかと考えることができる。

（3）兵庫津・神戸港の巡検と講演会

長い歴史を持つ神戸港のファンは多く，研究者のみならず多くの市民が神戸港の魅力を追い続けている。歴史探検ツアーやガイド付き町歩き，現地調査やその報告会，講演会等数が多くバリエーションも豊富で様々なターゲットに向けて企画されている。このことは長年のファンを魅了しつつ，さらには新しいファンを増やし続けていることの大きな理由といえるだろう。

以下は筆者が参加した講演会と現地調査報告会の一例である。

日程	2014年6月6日
タイトル	西国街道と兵庫津
場所	能福寺
主催	神戸商工会議所小売商業部会
内容	園田女子学園名誉教授である田辺真人氏による西国街道と兵庫津の密接な関係を中心とした講演会。兵庫津の象徴のひとつとされる兵庫大仏もある能福寺講堂で行う。

日程	2014年6月28日
タイトル	兵庫津遺跡第62次調査
場所	兵庫城下町跡
主催	神戸市教育委員会
内容	戦国時代につくられた兵庫城下の街路や町屋の跡が発掘された現地説明会。城下町の始まりは戦国時代とされているが、今回は江戸時代のものまで発掘されており、今後は鎌倉・平安時代の遺跡まで発掘される予定である。



写真1. 兵庫津遺跡

出所：兵庫津遺跡第62次調査現地説明会にて本人撮影（2014年6月28日）

3. 空間を渡って見る神戸港の地理的世界

(1) 日宋貿易の時代

平安中期まで重用されていた浪速津にも長期間使われるうちに弱点が生まれた。そこで平清盛は日宋貿易ではより条件の良い大輪田泊を用いることに決めて改築を始めた。しかし工事は難航し、講じられた策として二つの伝説が残っている。一つは清盛自らが一切経を石に写して奉納し、海を鎮めたというものである。もう一つは松王丸という少年が人柱となり海を鎮めたというものである。その後、工事は無事終了し、港は益々発展した。

清盛は大輪田泊の後背地である福原に遷都し人口を集中させることで、貿易の窓口としての港の機能、国家の意思決定を行う首都機能、国内商品と貿易品の生産と流通を行う経済機能の三つを一極に集中した三位一体の新都市、港湾都市を建設することを目標としていた。この構想は清盛の突然の死によって途絶えることとなったが、この地が重要な役割を果たすことに変わりはない。

(2) 江戸時代の様相

1769年、明和の上知で江戸幕府は兵庫津から西宮間の300余の村（17658石）を幕府領とした。当時、老中の田沼意次は経済の活性化を十祖する政策をとっており、株仲間の結成を奨励していた。そこで尼崎藩領から幕府領となった兵庫津でも株仲間結成の動きは盛んになった。従来、譜代大名が代々尼崎藩主となり兵庫津や西宮などを治めていたのは、西国の外様大名から大坂を守る上で重要であるという軍事的な意味があった。しかし幕府の中枢にいた田沼意次は、大坂を守ることよりも経済的に発展する尼崎藩地域を掌握する

とともに、中央市場としての機能が低下の兆しを見せはじめた大坂により強く充足することを優先したと考えられる。

天保年間（1781～89）には全国的に飢饉が連続発生し、大坂奉行所が米の買い占めを禁ずる触れや、貧乏人は粥を食えという触れを出したが、兵庫津でも打ちこわしが始まった。各地で起こった都市の打ちこわしは、老中田沼の失脚を早め、代わって老中松平和田信が幕府の中枢を担うようになった。定信は都市秩序の算定や農村復興、幕府財政の立て直しなどを主眼とした政治、いわゆる寛政の改革を行った。

次に、1833～36年の天明の大飢饉を契機とし、1841年から老中水野忠邦による天保の改革が行われる。株仲間の独占権が物価高騰の原因であると考えた幕府は、商品流通機構の再編を図るため、1842年、全国的に株仲間の差し止め、解体を命じた。このことは、兵庫津の商業に影響を与えた。

時代は少しさかのぼるが、兵庫津で活躍した商人には北前船の経営を行った者がいる。北前船は北国を周航して大坂に至る買積船で、当時蝦夷地と結ばれていた北海道まで行っていた。買積船とは、貨物を賃積みする船ではなく、目的地との往來の途中で寄港地ごとに積荷の有利な売買を行いながら巡航するものである。商業機能と運送機能が未分化のまま遠隔地の地域価格差に基づいて大きな利益をもたらした。近世中期以降、早くから北前船の経営に乗り出した北風荘右衛門家は一門の中で際立って繁栄した。また、北風家に注目され沖船頭（雇われ船頭）となったのが高田屋嘉兵衛である。北風家の北前船をうまく経営し、のちに船持船頭として兵庫津で酒・塩・木綿等を仕入れて坂田に運び、また酒田で米を購入して箱館に運んで売りさばき、箱館では魚・昆布・魚肥などを仕入れて上方で販売した。

（3）近代の発展

江戸時代の終わり、1863年のペリー来航をきっかけに兵庫津のもつ意味は大きく変化していく。日本は、翌1862年には日米和親条約を締結、続いてイギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を結んだ。その後、1858年には日米修好通商条約と附属貿易章程が結ばれた。この全14章からなる条約は、日本にとって不平等条約であったが、つづいてオランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様の条約を締結した。これに基づき翌年、まず神奈川（横浜）、長崎、箱館（函館）の3港が開かれ、貿易が開始された。兵庫港は1863年1月1日に開港予定であったが、勅許が得られず、幕府は開市・開港の5年延長を認められた。居留地が未完成ながら開港にはこぎつけたが、わずか3日後には王政復古の大号令が出され、事実上幕府が瓦解し居留地も大混乱した。落ち着く間もなく神戸事件が起こり、外国人が初めて切腹を目にしたのもこの神戸の地であった。

慌ただしく開港した神戸港だが、国内外の人々が行き交い、さまざまな文化が交流する場として大きな役割を果たしていたことは言うまでもない。急速に近代化を遂げた日本で、港は外国文化の受け入れ口であり、また外国文化を取り入れた新しい文化を生み出す場所であり、それと同時に不要な文化の流入を食い止めるバリアードの役割も果たしていたのである。

4. 神戸港の現在から未来へ

（1）神戸港から入ってきた文化

神戸はマージナル港都であるという人がいる。マージナルとは境界である。神戸は畿内の西端で畿内と畿外の境界にあり、そして瀬戸内海最大で最良の海外と日本をつなぐターミナルである。「新しい文化はマージナルな場所から生まれる」という言葉を残したのは、歴史地理学の第一人者で神戸市史にも精通した千田稔国際日本文化研究センター長である。

特定の境界的場所は、新しいものや珍しいものとの最初の出会いの場であり、人・モノ・情報がにぎやかに行き交う中で、異文化間の接触と交流、受信と発信が行われる場所なのだという。

神戸港を中心として広まったり栄えたりした文化の例として、英字新聞やスポーツクラブ、またスイーツなどの食があげられる。実際に今でも神戸に拠点を置くスポーツチームは多く、またパンやスイーツに対する世帯当たりの出費額も全国トップクラスである。100年以上も前に入ってきた文化は今でも地域の人々に愛され、そしてより時代に即したものへと変化し続けている。気に入った良いものを取り入れ、そしてより自分たちの本来の文化と融合させていくということが自然に行われているのは、筆者たち神戸市民の特徴的な気質であるともいえるだろう。

(2) 阪神・淡路大震災とその影響

1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）は阪神間や淡路に甚大な被害を与えた。港にも被害があったことは言うまでもない。港の設備は大きく破壊され、取り扱い貨物量は激減した。しかしその後の多大なる努力により、神戸港の取扱貨物量、コンテナ取扱量や外国貿易船の入港隻数は、1996年末の時点で震災前（1994年）の約80%に回復した。その後の神戸港での輸出・輸入金額は、ほぼ震災前の水準に達した。これらを支えたものの一つが、神戸港の長期復興計画である。1. 高規格コンテナターミナルの整備、2. モーダルシフトの推進、3. 臨海交通施設の整備、4. 港湾施設の再開発、5. 防災拠点の配置の5本を柱として、「21世紀のアジアのマザーポート」を目指し、国際貿易港として国際競争力を向上し、港湾機能の拡充と強化を図った。また、物流拠点、海上交通拠点として震災前以上の港湾機能の拡充を図るとともに「防災港湾」づくりを行った。そして、神戸港を国際拠点港湾として復興するため、ポートアイランド2期地区並びに六甲アイランド南地区で大水深の高規格コンテナターミナルの整備、多目的バースの整備、港島トンネルの整備、陳腐化した既設港湾設備の再開発などを推進したのである。

(3) 世界の中の神戸港

近現代の神戸港の発展に欠かせなかったコンテナ船の取扱いは、1980年にはアメリカ大陸のニューヨーク港、ヨーロッパ大陸のロッテルダム港に続き世界第3位の地位を誇っていた。そしてこの国際的な三大港湾が世界貿易の中心軸として港湾物流のネットワークに大きな役割を果たしてきた。その後ロッテルダム港はヨーロッパ大陸の中で不動の地位を確立し、ニューヨーク・ニュージャージー港も北米東海岸で1位である。しかし1990年から2000年にかけて大きく順位が下がっていることがわかる。その原因は、中国を中心としたアジア地域の急激な発展と阪神・淡路大震災が重なったことだと考えられる。その後もほぼ一貫して下がり続け、2003年以降は30位台、2007年以降は40位台が定着。直近2012年は第52位となった。ロッテルダム港やニューヨーク港が地域経済圏の首位の座を堅持する中であって、神戸港はアジア経済圏のみならず国内順位でも後塵を拝している。神戸港は1995年に横浜港・東京港に抜かれた後、国内首位に返り咲くことはなかった。また、国内五大港はいずれもアジア港湾に押し出されるかのように、低順位に甘んじている。

神戸港がなぜ世界順位を下げたのか、震災の影響やアジアとの地理的条件など不可避だったとの指摘する見方もある。しかし、日本の五大港湾全てが低迷していることや、日本海側の地方港湾は成長著しい点を踏まえると説得力に乏しいように思う。従って、荷主・船主などの港湾利用者側と港湾管理者側、その双方から原因を探る必要がある。

表 2. 世界のコンテナ取扱量ランキング

順位	1980年	1990年	2000年	2010年
1	NY (アメリカ)	シンガポール (シンガポール)	香港 (中国)	上海 (中国)
2	ロッテルダム (オランダ)	香港 (中国)	シンガポール (シンガポール)	シンガポール (シンガポール)
3	神戸	ロッテルダム (オランダ)	釜山 (韓国)	香港 (中国)
4	香港 (中国)	高雄 (台湾)	高雄 (台湾)	深圳 (中国)
5	高雄 (中国)	神戸	ロッテルダム (オランダ)	釜山 (韓国)
6	シンガポール (シンガポール)	釜山 (韓国)	上海 (中国)	寧波 (中国)
7	サンファン (アメリカ)	ロサンゼルス (アメリカ)	ロサンゼルス (アメリカ)	広州 (中国)
8	ハンブルグ (ドイツ)	ハンブルク (ドイツ)	ロングビーチ (アメリカ)	青島 (中国)
9	オークランド (ニュージーランド)	NY/NJ (アメリカ)	ハンブルク (ドイツ)	ドバイ (アラブ首長国連邦)
10	シアトル (アメリカ)	基隆 (台湾)	アントワープ (ベルギー)	ロッテルダム (オランダ)

出所：日本銀行神戸支店（2013）「神戸港の質的変貌～集荷力低下と将来像」を参照に筆者作成

5. おわりに

第1章では通時態の観点から、神戸港の編年史を作成した。神戸港の歴史の長さや何度も歴史の舞台に登場したことがわかった。国内外との貿易では重要な役割を果たしたり新たな道を開いたりしており、国内の権力争いなど歴史に大きな影響を与えた出来事も多くあった。

第2章では共時態の視点から、神戸港の存在が国内情勢と国際関係にどのような影響を与えたのかを考察した。大輪田泊として日宋貿易で平清盛に重宝された時代、町人たちが国内で商船による廻船業などを営み、大坂に負けず劣らず栄えた時代、そして明治維新と文明開化を支えた時代の三つを取り上げた。それぞれの時代において港に求められた能力は異なるが、神戸港は長い間その歴史をとだえさせていない。筆者は、その理由は神戸港が各時代の要請に応じて姿を変えていったからだと考えている。

第3章では、現代の神戸に残り日本全体にも広がりを見せた文化と、神戸港にも大きなダメージを与えた阪神・淡路大震災とその復興、そして神戸港のこれからに求められることを考えた。筆者は兵庫県が開催している「ひょうご防災リーダー養成講座」に参加して防災や減災について学び、防災士の資格を取得した。神戸市も「防災マスター」という称号をつくり、防災意識の向上を図っている。今後もこの活動は継続して行われる必要があると改めて感じる事ができた。また、神戸港は諸外国の文化の受入れ口となり、全国への新しい文化の発信地ともなった。明治時代から続々と入ってきたファッションやスポーツ、またスイーツを筆頭とする食文化は、震災からの復興と将来の発展に欠かせないものとして現在も神戸を支えている。

この研究を通じて筆者が確信をもったことは三つある。一つ目は、神戸の地は日本有数

の港町として長い歴史と伝統を誇れること。二つ目は、各時代において兵庫津・大輪田泊・兵庫津・神戸港と名を変えながらも常に地域や国全体の要請にこたえ、非常に大切な役割を果たしていたこと。三つ目は、未来の神戸港にもまだ果たすべき役割とそれに向けての課題があるということである。今後も神戸港の魅力を追い続ける。

参考文献

- 石井進 ほか 12 名 (2009) : 『詳説日本史 改訂版』, 山川出版社, 408p.
神戸外国人居留地研究会(2005):『神戸と居留地 多文化共生都市の原像』, のじぎく文庫, 福岡宏一発行, 259p.
神戸史談会 (1981) : 『源平と神戸 福原遷都から 800 年』, 神戸市教育委員会, 200p.
神戸市兵庫区役所 (2011) : 『江戸幕府領時代の兵庫』, 歴史資料ネットワーク, 神戸市兵庫区まちづくり推進部まちづくり課発行, 20p.
国土交通省「国際定期コンテナ航路の比較～瀬戸内海の港湾と神戸港」
五味文彦 ほか 48 名 (2014) : 『新しい社会 歴史』, 東京書籍株式会社, 263p.
日本銀行神戸支店 (2013) : 「神戸港の質的変貌～集荷力低下と将来像」

参考 URL

神戸港築港への歩み : 年表

http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/_know/p6/html/p-1-4.html
(2014年 12月 4日アクセス)

神戸港湾事務所 : 阪神・淡路大震災からの復興の足跡

http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/_know/prevention.html
: 電子資料館. http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/_know/p6/html/p-3-1.html
(2015年 1月 18日アクセス)

須磨環境協会. <http://www.suma-kankokyokai.gr.jp/>

: 歴史を知る

<http://www.suma-kankokyokai.gr.jp/modules/gnavi/index.php?cid=10&page=category>
: 古代～中世～近世～近現代の須磨

http://www.suma-kankokyokai.gr.jp/modules/pico/index.php?content_id=13
: 須磨の由来

http://www.suma-kankokyokai.gr.jp/modules/pico/index.php?content_id=5
(2015年 1月 18日アクセス)

兵庫県播磨町 : 新聞の父 ジョセフ・ヒコ

http://www.town.harima.lg.jp/profile/profile_senkakusya/profile_senkakusya_josefu.html
(2015年 1月 18日アクセス)

Time and Space around the Kobe Port
—Historic development and Geographical world—

SUMIMOTO Maya

Key Words: Owada-no-tomari, Hyogo-no-tsu, the Kobe port,
Treaty of Amity and Commerce (the U.S.-Japan), the Great Disaster of hanshin-awaji Earthquake